



アカシア俳句会



令和五年

秋季俳句会

「句評」

「秋」の季語を含む作品一〇五句

一、「特選句」 選定句評

○すすきの穂空のあなたにさようなら

野本展子

◆この歳になると「別れの句」が心に響きます 生前の仲の良さが表れています

佐藤茂弘

○真っ直ぐに散りては咲いて萩の花

野本展子

◆「咲いては散って」ではなく「散りては咲いて」それが「真っ直ぐ」とても真似できないと思えました

藤井光正

○スクラムが崩れ球飛ぶ秋の空

加龍恵子

◆オリンピック予選の日本対アルゼンチンのラグビーの対戦を思い出させる若さと力みなきる様子が目に浮かびます

都 福仁

◆ラグビーワールドでは激しく体当たり格闘する若者の姿に驚き眩しさを感じましたその臨場感をうまく描写しています

西村敏治

○振れ多き老いの哀楽芒の穂

戸堂博之

◆すすきの穂の揺れに 老いの哀楽を見るとは・・・感服しました 同じすすきでも感じ方は色々 俳句の面白さを感じました

野本展子

○秋夕陽帰らぬ友の棲むところ

藤井光正

◆帰らぬ友が増えてきたわたしたちの昨今 美しい夕日が友の棲むところという考えに慰められます

山家由紀

○この星に戦は絶へず秋暑し

山家由紀

◆あちこちの悲惨な戦争はいっつ止むのか？この青い星の未来は？作者の憂慮が秋暑しに集約されていると思います

中野亘子

◆死と破壊のみの戦 譲り合い知恵を尽くせば 世界恒久平和条約締結は可能 限りある命の謳歌を

網 佑子

○サザン聴きつつワイン飲む秋の夜

山家由紀

◆俳句論を考える前に雰囲気飲み込まれました 赤ワインでしょうね 間もなくヌーボの季節ですね

前田秀一

野村万作氏ら 文化勲章7人

政府は20日、2023年度の文化勲章3面きょうのことばを能楽の野村万作氏(92)、経済学の岩井克人氏(76)ら7人に贈ることを決めた。文化功労者には海内の里中瀧智子氏(75)、現代美術の横尾忠則氏(87)ら20人を選んだ。文化勲章の親授式は10月3日に皇



功労者 里中瀧智子氏ら

化学・有機金属化学の玉尾皓平氏(80)。文化功労者はほかに、発生物学の阿形清和氏(89)、電子工学の荒川泰彦氏(70)、経営学の伊丹敏之氏(78)、ウイルス学の河岡義裕氏(87)、ファッションの川久保玲氏(81)、メディア芸術の河口洋一郎氏(71)、能楽の鶴田清和氏(84)、俳優の北大路欣也氏(80)、スポーツ振興の木村興治氏(82)、日本語学の金水敏氏(87)、書の黒田賢氏(86)、版面の中林忠良氏(86)、日本画の牧野氏(87)、長唄の東宮田哲氏(89)、工芸の宮田豊平氏(88)、評論の矢野龍一氏(88)、経済学の吉川洋氏(72)。

○身を包む爽涼の気や命(いのち)醒(さ)む

網 佑子

◆命醒むという表現が まさにピッタリときて素晴らしいと思いました

吉田以登

○草の穂にとんぼの重さ揺れており

前田秀一

◆先日 奥明日香の稲渚の棚田で赤とんぼの群れに出会った時を思い出して選びました

三木徳彦

○櫨紅葉今を盛りと水鏡

前田秀一

◆山の静かな湖に まっ赤な櫨の紅葉 そして水面に揺らぐ紅葉が目には浮かびます 素晴らしい

吉澤志保子

◆秋景色の情景がストレートに美しく伝わるよい句だと思いました

元永悦子

○朽ち案山子大見得切りて夕日落つ

前田秀一

◆ノックもせずに入ってきた突然の秋 案山子も余り見ぬようになり これも昭和の回顧録

戸堂博之

◆切り株だけとなった田の落ち穂に集まる雀の群れ そこに立つ案山子に真つ赤な夕日が

加龍恵子

二、「編集後記」

川淵三郎さんが栄えある文化勲章を受賞されました。

おめでとーございませう。

同窓同期生として大変光栄なことでありこの上ない慶びであります。

細やかではありますが、引き続き「慶祝俳句会」を開催し、この慶びとお祝いの心を俳句に乗せ詠わせていただくことにします。

選句会員の皆様も奮ってご応募ください。発表は、別途ホームページ上に公開します。

◆「土生重次師俳句語録」(**)

*…小川誠二郎編二〇〇一『抄録・重次俳句論―土生重次、かく語りき―』(復刻) 扉俳句会運営委員会
《今回の学び》

俳句は『坐五』(*)がいのち

*…『坐五』下(しも)五文字

一六七頁

どちらからともなく会釈遍路宿

岡部深雪

「会釈」という言葉は、よく俳句に使われる。しかし「どちらからともなき」と捉えた人はいない。それ以上に作者の視点の鋭さを「遍路宿」に感じる。これを例えば「草刈り」、「摘み女」に換えてみれば解る。ややはじらいをもちながら、会釈を交わす者の今夜を共にする場が遍路宿なのだ。信心組も不信心組もまじっている。ただし軽い重いはあっても、それぞれ生きる上で何かを背負っているのだ。堂々たる会釈でないことが感動の世界に導いてくれる。

俳句は「坐五で決まる」、見本のような句だと思う。

鶯は語尾ゆるやかに読経続く

片岡昭男

この作品みても、俳句は「坐五がいのち」だと思う。一句の要ということだ。この要が一句を引緊めるのである。

照男さんの作品の眼目は「読経尽く」にある。「読経」が「尽きた」のである。「終わった」のでもなければ、「果てた」のでもない。

まさに「読経」は「極限にまで達つ」したのであり、「きわまった」のである。単に「終わった」のではないのだ。この思いを導入する助走的な役割を果たしているのが「語尾のゆるやかに」と捉えた独自の感覚にある。「坐五を要とする」には、そこに到る導入部の重要さが分かっていただけだと思う。

《これまでの学び》

既発行済『句評』編集後記掲載

◇「俳句は叙事詩である」 季語―非凡の一節を支えるもの

令和五年『冬季・新年俳句会』

◇「俳句はモノに託して心を詠う文芸である」

令和四年『秋季俳句会』

◇「俳句は『心』や『情』を直接的に詠ってはならない」

令和四年『秋季俳句会』

◇「俳句は『今』をとらえた文芸である」

令和五年『春季俳句会』

◇「俳句は『何を詠うか』ではなく、『いかに詠うか』だ」

令和五年『春季俳句会』

◇「俳句は感動を詠う詩である」

令和五年『夏季俳句会』

◇「俳句は自然と人間との関わりを詠う詩である」

令和五年『夏季俳句会』

◇「俳句は『坐五』(*)がいのち」 *…『坐五』下(しも)五文字

令和五年『秋季俳句会』



講師：田中睦康氏（元三国丘高校教諭） 参加者：現役生徒と卒業生



「アカシア俳句会」会員ほか七期生参加者

詳細は、以下の手順でホームページへアクセスしてください。
 検索エンジン「三丘同窓会」→クリック⇒「新着情報」
 →「2023.8.29 俳句の講演会を開催／戸堂博之さん」クリック

編集人
前田秀一

三丘同窓会（旧制堺中学校および三国丘高校の同窓会です）
 1時間

8月25日に俳句の講演会が母校視聴覚教室で行われます。卒業生歓迎とのことです。くわしくはリンク先をどうぞ。
<http://sankyuu.sakura.ne.jp/topics/event.html>

堺中以来の
 伝統文芸の継承を！
 目指せ、俳句甲子園！

講演会 8月25日(金) 午後3時15分より 卒業生の演劇歓迎！

○場所 視聴覚教室
 ○講師 「俳句のいろはを教えます」
 ○講師 田中 睦康 俳句：春生いはいん
 （元三国丘高等学校教諭）

横断俳句会 参加者の皆さんが選ぶ秀句のコンテストを併催

◆戸堂博之さんが、母校に「俳句講演会」（令和五年八月二十五日）を寄贈されました。